

Title	高齢者を介護する家族のストレスと心理的安寧に関する実証的研究
Author(s)	安部, 幸志
Citation	
Issue Date	
Text Version	ETD
URL	http://hdl.handle.net/11094/60
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	安部幸志
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 17472 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	高齢者を介護する家族のストレスと心理的安寧に関する実証的研究
論文審査委員	(主査) 教授 柏木 哲夫 (副査) 教授 大坊 郁夫 助教授 恒藤 暁

論文内容の要旨

本研究は、我が国において、心身に障害を持つ高齢者を介護する家族のストレスを実証的手法を用いて多角的に検討したものである。本研究は 6 章から構成されている。

第 1 章 序論

第 1 章では、在宅において高齢者を介護する家族の抱える悩みと生活に与える影響について、内外の文献を概観した。その結果、介護者の抱える様々な負担を Lazarus & Folkman (1984) のストレス認知理論に依拠し、「介護ストレスに対する認知的な評価」として捉えることの必要性が示唆された。また、介護者のストレス事態に対する肯定的な評価や対処方略などの研究が少ないため、現在のところ一貫した結果が得られていないことが明らかとなった。加えて、介護者による高齢者虐待やネグレクト行動に関する実証的研究はほとんど行われておらず、その原因や心理的要因との関連について調査することが急務であることが示された。

また、現在、我が国では介護保険法が施行され、様々な介護サービスが高齢者に提供されている。そこで、介護サービスと介護ストレスに関する文献を概観したところ、欧米では、近年、デイサービスや施設入所などが介護ストレスに及ぼす影響に焦点をあてた研究が増加していることが示唆された。しかし、それらの研究においても、サービスの回数や利用そのものに着目した研究が多く、サービスの質やその評価に関する研究はほとんど行われていない。そこで、介護サービスの質を評価し、介護ストレスとの関連について検討することが必要であると考えられた。これらの議論をもとに、本研究の目的として、①介護者のストレスに対する影響要因およびストレスプロセスそのものを解明し、②介護サービスの質に関する評価方法を提案し、それが介護ストレスに及ぼす影響について検討することの二点を設定した。

第 2 章 属性要因と介護ストレス

第 2 章では、介護者および高齢者の属性要因と介護ストレスとの関連について検討した。本研究では、介護者の属性要因として、介護者の性別、高齢者との続柄、年齢、教育歴、副介護者の存在、仕事の有無、健康状態、経済的余裕、家族や親戚からの社会的支援、介護拘束時間、被介護者の属性要因として痴呆の有無、要介護度を測定し、介護ストレスとの関連について 1999 年度のデータと 2001 年度のデータを用いて分析を行った。その結果、性別について

は両データとも介護ストレスとの関連がみられなかったが、続柄、年齢についてはデータによって関連があるものではないものに分かれ、知見が一致しないことが示された。また、2001年度データのみで測定した仕事の有無、健康状態、経済的余裕、社会的支援、介護拘束時間は、いずれも介護ストレスと有意な関連があることが明らかとなった。しかし、被介護者の属性要因として測定した痴呆の有無や要介護度と介護ストレスとの関連はみられず、高齢者における心身の障害をより詳細に測定する必要があることが示唆された。そこで、高齢者における心身の障害を Haley et al. (1996) と同じく「認知障害」、「ADL 障害」、「問題行動」の三つの側面から捉え、介護ストレスとの関連について検討したところ、これらの障害はすべて介護ストレスと有意な相関があることが観察された。

第3章 介護者のストレス評価

第3章では、介護ストレスを捉える上で中核となる概念である介護ストレスに対する認知的評価について検討した。まず、これまで「介護負担」として捉えられてきた要因を「介護ストレスに対する認知的な評価」として操作的に定義し、介護ストレス認知評価尺度の作成を試みた。因子分析の結果、この尺度は「社会的拘束感」と「身体的消耗感」の2因子から構成され、代表的な介護ストレスであるうつ気分とも有意な相関があることが明らかとなった。また、この尺度は高齢者における心身の障害や他の基準となる尺度との相関も高いことが明らかとなったため、信頼性および妥当性が非常に高い尺度であることが示唆された。

次に、近年問題となっている家族の介護遺棄について検討するために、ネグレクトに繋がると考えられる行動を「潜在的ネグレクト行動」と定義し、尺度化を試みた上で、介護ストレスとの関連について検討した。その結果、「潜在的ネグレクト行動」は介護ストレスやうつ気分とは何ら関係がなく、介護ストレスに対する認知評価とのみ有意な関連が見られた。これは、ネグレクト行動を予測し、予防するためには、介護者のストレス評価をアセスメントし、対策を講じることの必要性を示すものと考えられる。

第4章 介護ストレスの緩衝・調節要因と心理的安寧

第4章では、介護ストレスの緩衝・調節要因である介護マスタリーとコーピング方略、そして介護者の心理的安寧について新しい立場から検討した。まず、介護者は、必ずしも介護に対し否定的な想いのみを抱いているだけではなく、介護を長期間継続することによって様々な側面を学び、人間として成長することもあるという立場から、「介護マスタリー」尺度の開発を試みた。因子分析の結果、介護マスタリー尺度は「介護役割への達成感」と「介護に関する対処効力感」の2因子から構成され、ストレス反応との関連を分析した結果、この介護マスタリーを高めることがストレス反応を軽減し、心理的安寧を維持することにつながることを示唆された。

また、介護者のコーピングがストレス反応に与える影響について、岡林他(1999)を参考に介護ストレスとストレス反応の媒介要因としてモデルに布置した上で検討したところ、岡林他(1999)と同じく、我が国の介護者では、問題解決型の対処が有効ではないことが観察された。今後は、いたずらに介護に向かっていくのではなく、我が国の社会や文化的背景に即した対処方法について検討することが必要であることが示唆された。

介護者の心理的安寧として、これまでは抑うつに代表される精神的健康に着目されることが多かった。しかし、精神的に健康なことがすなわち心理的に安寧であることを意味するとは限らない。介護者の心理的安寧について検討するためには、精神的健康に加えて、幸せを感じることや平和な毎日を送っていることなど、より生活と密着した肯定的感情を測定することが重要である。そこで、生活や営みの状態に関連した主観的な安寧感を測定する「心理的安寧感」尺度の作成を試みた。その結果、この「心理的安寧感」は信頼性・妥当性ともに十分高い値であることが示唆された。今後は本尺度を用いて、介護者の心理的安寧を否定的な側面ばかりではなく、肯定的な側面からも検討することが期待される。

第5章 介護サービスに対する評価と介護ストレス

第5章では、まず高齢者の望みの一つである、在宅での介護を継続可能としている要因について介護者の自由記述を探索的に分析した。その結果、「家族介護者の精神的・身体的問題」、「サービス体制に関する問題」、「家族介護者と周囲との人間関係上の問題」、「被介護者(高齢者)の問題」、「政策に関する問題」、「ケアワーカーに関

する問題」、「住宅環境の問題」、「経済的問題」の8カテゴリーが分類された。これらは大別すると、介護サービスに関連する要因と介護者・被介護者に関連する要因に分類されると考えられ、これらと関連が深いと思われるサービスへの満足度や介護ストレスを捉えることの重要性が改めて示唆された。

次に、その在宅介護の継続を可能にさせている介護サービスの質について検討するために、「ケアワーカーによる支援行動」を社会的支援に関する研究の知見を踏まえ、情緒的側面と道具的側面に区別し、新たな尺度の開発を試みた。この尺度開発においては、予め「高齢者に対する道具的支援」、「高齢者に対する情緒的支援」、「介護者に対する道具的支援」、「介護者に対する情緒的支援」の4因子モデルを設定し、このモデルに適合するよう項目選択を行った。その結果、モデルに合致することが確認された項目が選択され、これらの項目から「ケアワーカーによる支援行動尺度」が構成された。この尺度と介護サービスに対する満足度との関連は有意であり、この尺度が介護サービスの質を評価する測度として適切であることが示唆された。

最後に、この「ケアワーカーによる支援行動」が介護ストレスに及ぼす影響について、いくつかのモデルを構築した上で検討した。その結果、「ケアワーカーによる支援行動」は、「サービスのおかげで楽になった」などのサービスが与える「効果」に対する評価に影響しており、その「効果」に対する評価が、介護ストレスに対する評価に影響しているというモデルが分析によって支持された。このモデル上において、「ケアワーカーによる支援行動」は直接介護ストレスに影響を与えてはいないが、サービスの「効果」に対する評価を上昇させ、その結果介護ストレスを軽減していることが示唆された。

第6章 総合論議

第6章では、これまで本研究にて得られた知見をまとめ、介護ストレスプロセスの新たなモデルを提示するとともに、本研究で得られた知見から、臨床に向けて提言を行った。

本研究は、介護ストレスプロセスの解明とサービスの質との関連について検討することを目的としたが、いくつかの課題が残されている。中でも、サンプリングに関しては、特定の施設や市区町村のみで調査を行うのではなく、全国規模で調査を行うことが必要であると考えられる。また、介護ストレスに関する研究はまだ数が少なく、知見の同定には至っていない部分も多い。さらに活発な議論を行い、知見を現場に還元していくためにも、介護者の心理やストレスに着目した研究のさらなる増加と発展が強く希望される。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心身に障害を持つ高齢者を介護する家族のストレスを実証的方法を用いて多角的に検討したものである。具体的には1) 介護者のストレスに対する影響要因及びストレスプロセスそのものを解明し、2) 介護サービスの質に関する評価方法を提案し、それが介護ストレスに及ぼす影響について検討している。

特に注目すべきは、「ケアワーカーによる支援行動」を情緒的側面と道具的側面に区別し、新たな尺度の開発をした点である。この尺度と介護サービスに対する満足度との関連は有意であり、この尺度が介護サービスの質を評価する測度として適切であることが実証された。

以上の研究成果より、本論文は博士（人間科学）の学位に充分値すると判定された。